

「共にささげるミサを学ぶ」

「母なる教会は、すべての信者が、典礼の執行への、充実した、意識的かつ行動的な参加へ導かれるように切に希望している。このような参加は、典礼そのものの本質から要求されるものであり、キリストを信ずる民は、『選ばれた民族、王の祭司、聖なる民、神のものとなった民』（1ペト 2.9）として、洗礼によってこれに対する権利と義務をもつのである」（『典礼憲章』14）

1. 開祭の儀

入祭、挨拶、回心の祈り、あわれみの賛歌、栄光の賛歌、集会祈願は、開始、導入、準備のためにある。それは、一同に集まった会衆が心をつにして一致するためであり、また神のことばを正しく聞き、「感謝の祭儀」（エウカリスティア）を相応しく行うように自らを整えるためである。集会に参加できなかった人々、毎週きちんと来ない人々、欠席している信者も集会の一部をなしている。

入祭：会衆が集まってから、司祭が奉仕者と共に入堂するとき、入祭の歌が始められる。この歌の目的は、祭儀を開始し、会衆の一致を^{うなが}し、会衆の思いを典礼季節と祝祭の神秘に導入し、司祭と奉仕者の行列を飾ることである。

入祭の歌が終わると、司祭は会衆と十字架のしるしをする。それから司祭は、集まった共同体に挨拶をして、主の現存を示す。この挨拶と会衆の応答は、共に集まった教会の神秘を表す。

回心の祈り：共同体全体が一般告白によって回心し、司祭の赦しのことばによって結ばれる。

あわれみの賛歌：この歌は、信者が主キリストに呼びかけて、そのあわれみを願う歌である。「キリエ・エレイソン」は、すでにギリシャ東方典礼で4世紀から、連願の中で嘆願に対する会衆の応答であった。

栄光の賛歌：中世初頭には、「テデウム」と同じように祝日の歌として用いられ、ローマではすでに6世紀以前から主日と祝祭日のミサに採り入れた。聖霊の内に集う教会は、この歌で神なる父と小羊を讃える。

集会祈願：司祭は「祈りましょう」と言って会衆に祈りを勧める。そして各自沈黙のうちに祈り、自分たちが神の御前にいることを意識し、自分の願いを思い起こす。それから、司祭は「集会祈願」によって祭儀の性格を現し、聖霊に

において、キリストをとおして、父なる神に向けて祈りをささげる。皆の祈りをまとめるということから、一般的内容になり勝ちであるが、できるだけ、日々の生活からかけ離れないようにすべきである。司祭の祈りのスタイルは、手を広げオランス（初期キリスト教時代の祈る姿勢）の形をとる。

会衆は、この嘆願に心を合わせ「アーメン」と答え、自分たちの祈りとする。（**Amen** はヘブライ語で、すでに旧約聖書の中でも使われていて、会堂の礼拝では会衆の同意と確認の応答であった。祈りの終わりに会衆は、この「アーメン」によって信仰告白を、キリストに倣って行うのである）。

2. ことばの典礼

ことばの典礼は、聖書朗読とそれについての説教と詩編の歌によって構成される。まさに、みことばによって神は、その民にそのとき、その場で直接語られ、あがないと救いの神秘を解き明かし、霊的な糧を豊に与えられる。また、キリストご自身は、ご自分のみことばによって信者の間に現存される。この神のことばに会衆は、歌で応答しながら自分のものとして受け止め、信仰宣言によってそれを表明する。

聖書朗読：聖書朗読によって神のことばの食卓が信者に備えられ、聖書の宝庫が開かれる（『典礼憲章』51）。朗読が終わると、会衆は答唱する。朗読者は祭壇の前に侍者と共に並び一礼し、侍者に従って朗読台に行き、朗読し終わったら聖書にまた一礼する。そのとき、侍者が「神に感謝」と答える。第一朗読と第二朗読の後、みことばを受け止めるために少し黙想する。

アレルヤ唱：会衆は、福音で語られる主に、立ってこの歌の歓呼で挨拶し、信仰を表して迎える。これはかなり早い時期から、特に復活節に喜びと賛美を表すために歌い始めた。

福音の朗読：司祭は福音書に十字架のしるしをしながら、「・・・による福音」と唱え、会衆は「主に栄光」と答える。読み終わると、司祭は「キリストに賛美」と福音書をおしいたいて唱え、会衆も「キリストに賛美」と答える。このように信者は、キリスト自身がみことばの中に現存され、自分たちに語っておられることを、応答によって確認し、公言し起立して拝聴する。

説教：キリスト者の信仰生活の糧として受け止め、終わった後黙想する。

信仰宣言：会衆が聖書朗読と説教をとおして聞いた神のことばに共鳴し、応答し、やがて始まる「感謝の典礼」を行う前に、信仰の規範を確認する。

共同祈願：この「信者の祈り」において、会衆は自分たちの祭司職の務めを実行して、すべての人のために祈る（普遍的祈り）。意向は、通常以下の順序で示される。イ 教会の必要のため、ロ 国政に携わる人々と全世界の救いのため、ハ 困難に苦しむ人々のため、ホ 現地の共同体のため。ただし、堅信、結婚、葬儀などにおいては、内容を考え意向の順序を決めることができる。

3. 感謝の典礼

最後の晩さんで、主は「過越のいけにえ」と会食を制定され、ご自分が行い、ご自身の記念として行うよう弟子たちに託されたのと同じことを、司祭が主キリストの代理として行うことにより、十字架の「いけにえ」が**現存（現在化）**する。ところで、十字架上でのイエスの死は、旧約聖書に示されているような伝統的な「いけにえ」ではなかった。実に、主ご自身が、ささげる本人であり、同時にご自身が「いけにえ」そのものでもあり、まさにこの奉獻によって、御父に最高の賛美をささげ、世界のための救いのみ業を遂行なさったのである。このキリストの奉獻は、教会の典礼において常に**現在化**され継続される。

供え物の準備：この準備が典礼の中に取り入れられたのは、東方典礼では四世紀である。まず、感謝の典礼の中心である祭壇、すなわち主の食卓の準備をするため、コルポラーレ、プリフィカトリウム、カリスが祭壇に置かれる。

奉納行列：西方典礼では、会衆の参加が強調されたので、行列して奉納物をささげるようになった。十一世紀以降から、次第に他の供え物はすべて献金にとって代わられた。信者がパンとぶどう酒、献金を祭壇の前まで運ぶ間、会衆は立って「奉納の歌」を歌い、行列が戻ったとき着席する。

奉納祈願：供え物の奉納とそれに伴う儀式では、水を少量ぶどう酒に加えるのは、キリストの受肉で始められたことが、この秘跡によって成就され、またわたしたちが人となられたお方の神性に与るためである。

感謝の祈り（奉獻文）：ここで、感謝の祭儀全体の中心であり頂点である「感謝の祈り（奉獻文）」、すなわち感謝と聖別の祈りが始まる。この祈りの意義は、信者の集会全体が自らをキリストと共に奉獻することにある。「ただ司祭の手を通してばかりでなく、信者も司祭と共に汚れなき『いけにえ』を奉獻し、自分自身をささげることを学び、こうして、キリストを仲介者として、日々神との一致と相互の一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなる

ように全力を傾ける」(『典礼憲章』48)。

- 1) 叙唱前句：「主は皆さんと共に」、「また司祭と共に」、「心をこめて神を仰ぎ」、「賛美と感謝をささげましょう」。
- 2) 叙唱：神を賛美し共同体を前にして、公に告げ知らせると二重の意味で、「前で述べる」のである。
- 3) 感謝の賛歌：これは会衆によって歌われるミサ曲としては最も古い。
- 4) 聖霊の働きを求める祈り（聖別のエピクレイシス）によって、供え物がキリストのからだと血になるよう、また、これを分かち合うことによって、汚れのない「いけにえ」がそれに与る人々の救いになるように祈る。
- 5) 聖体の制定の叙述と聖別：キリストが最後の晩さんにおいて制定されたもので、パンとぶどう酒の形態のもとに、ご自分のからだをささげ、わたしたちと一緒に食べ、飲むように分かち合われよう命令されたのである。
- 6) 記念（アナムネシス）：教会は使徒を通して主キリストから受けた命令を実行し、キリスト自身の記念を行い、特に、その幸いなる受難、栄光ある復活、そして昇天を思い起こす。さらに、「キリストの御からだと御血に、共に与るわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれるように」と聖霊に祈る（交わりのエピクレイシス）。
- 7) 奉献：ホスチアを持ち上げるのは、元来供えるときに作法でありユダヤ人の食事の儀式に由来する。聖霊によって、汚れない「いけにえ」を御父にささげると同時に、わたしたち自身をもささげる。
- 8) 取り次ぎの祈り：生者と死者を問わずすべての人のために、奉献が行われることを祈る。
- 9) 結びの栄唱：これは古典的なキリスト教の祈りの基本定式であり、神の栄光への賛美が表され、会衆は応唱によってこれを確認して「感謝の祈り」を結ぶ。

交わりの儀：パンを裂き分かち合うことによって、主と交わりまたお互い同士の交わりと一致を体験する。拝領の後、沈黙のうちに感謝する。

4. 閉祭：派遣の祝福と閉祭の挨拶がある。「主キリストの平和の福音を告げ知らせるために、喜びのうちにいきましょう」。

結び：ミサは、イエスご自身が教会によってご自分を御父に奉献して感謝し賛美する祭儀であら、エウカリスティア（感謝の祭儀）である。